

Title	計画5-6 ニホンザルが農耕地や人家周辺に出現するときのオスの関わり(X.共同利用研究 2.共同利用研究成果)
Author(s)	斎藤, 千映美; 清野, 紘典
Citation	霊長類研究所年報 (2004), 34: 130-131
Issue Date	2004-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/166027
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

集した。この標本については次年度にミトコンドリア遺伝子の分析を行う予定でいる。

計画 5-4

管理を目的とした三重県下のニホンザル遺伝子モニタリング

赤地重宏（三重県中央家畜保健衛生所）

三重県下においてはニホンザルの被害防除を目的とし、電波発信機をサルに装着することで、その群の位置を把握し、山へ追い上げる等の対策を実施している。発信機装着のためのサル捕獲の際、採血を実施することで血液材料を多数採集することができた(2003年8月現在で約400検体)。今年度はそれらサンプルから抽出したDNAを用い、霊長類研究所のキャピラリーシーケンサーを利用して遺伝子の解析を実施した。実施し得たのは38検体で、結果の検討については現在進行中である。今後、継続して未検査の検体の解析と検討を進め、地域個体群の遺伝的構造を明確にしたいと考えている。また、近県においてニホンザルとタイワンザルとの交雑が問題になっていることから、これらサンプルからタイワンザル遺伝子の検出も試み、交雑が起こっているか否かを明らかにしたい。

計画 5-5

保護管理にむけた中部山岳地域のニホンザルの遺伝的多様性解析

森光由樹（野生動物保護管理事務所）

生態系を保全し、生物の多様性を維持することは現代社会において重要な課題である。ニホンザルの場合、狩猟や有害駆除による捕殺や道路網の発達、宅地造成などによって生息地が分断・縮小され、地域個体群の孤立化や局所的絶滅が進行していると考えられている。これまで報告者は、中部山岳地方に生息している個体のミトコンドリアDNAのDループ超可変域、412塩基対をPCRで増幅し塩基配列の解読作業を実施してきた。今年度の研究では、情報の少なかった群馬県の試料を用いて、同法にてmtDNAを分析して周辺県の個体ですでに検出されている塩基配列と比較した。その結果、観察されたハプロタイプは東北、北アルプス、西日本ですでに発見されているタイプか、もしくはそれに近いタイプであった。なかでも水上町、新治村に生息しているいくつかの群れは行動圏が隣接しているにもかかわらず、まったく別系統の東北と西日本のタイプであった。マイクロサテライトの分析は、昨年度実施した試料の調製法、実験条件をより詳細に整理し、本試験で用いるための試料の選定作業が進められた。今後も引き続き分析作業を実施していく予定でいる。近い将来ニホンザルの保護管理を遂行する上での重要な参考資料になると考えている。

計画 5-6

ニホンザルが農耕地や人家周辺に出現するときのオスの関わり

斎藤千映美・清野紘典（宮城教育大）

対象群である仙台市西部に生息する奥新川A群(96頭)は、約8年前から農作物に加害するようになった。もっとも被害が深刻な8月～10月の間に群れを追跡して、サルが農地に出現したら出没個体の性年齢を記録し、ランダムに個体1頭を選択しスキヤニングした。これらから出現した農地の物理条件(農地から人家及び林縁までの距離)、農地滞在時間、出現順、出現頭数、行動を調べた。

その結果、①人家から近く、林縁から遠い農地には、サルは出にくい。②出現順と総出現割合からオトナ・ワカモノオスは他のクラスより率先して、かつ頻繁に農地に出現する傾向が見られる。③各行動でのスキヤニング頻度から農地において、サルは採食中にもっとも頻繁に警戒行動を示す。④性別に

よるスキヤニング頻度の違いから農地では、オスよりもメスの方が警戒心が強く、他個体や周囲を気にする傾向がある。⑤属性ごとのスキヤニング頻度の違いからオトナ・ワカモノオスは、農地に出現中には他のクラスより警戒心が希薄であるという以上5つが示唆された。

計画 5-7

富山県のニホンザル地域個体群の分布特性と遺伝子変異

赤座久明（富山県立新川みどり野高等学校）

14 年度共同利用研究（自由 19）において、富山県の丘陵地に生息するニホンザルの群れは、ミトコンドリア DNA の塩基配列の比較から、遺伝的に異なる 4 つ集団（A, B, C, D）から構成されていることが分かった。この結果を第 19 回日本霊長類学会で報告した。15 年度は、北アルプスを源流にする常願寺川と黒部川の上流域で DNA 試料の採取をおこなった。立山連峰の西側に位置する常願寺川の支流（標高 1200m）で採取し、DNA を抽出することができた 7 個の糞はすべてが A タイプであった。また、立山連峰の東側に位置する黒部川の本流と支流（800m～1900m）で採取した 1 個体（メス）の血液と 15 個の糞はすべて D タイプであった。一方、黒部川の東側に位置する後立山連峰の岩小屋沢岳（2630m）から鳴沢岳（2641m）にかけての稜線で採取した 4 個の糞のうち 2 個は B タイプであったが、他の 2 個はこれまでに県内では記録されていない新しいタイプ（G タイプ）であった。常願寺川流域は A タイプ、黒部川流域は D タイプが、下流の丘陵地帯から上流の生息限界域まで連続分布しているが、夏に黒部川右岸の後立山連峰の稜線部を利用する群れは、黒部川沿いに分布する群れとは遺伝的に大きく異なる集団であることが推定される。

計画 5-8

白神山地野生ニホンザル群と地域社会の共生に関する研究

今井一郎（関西学院大）

本研究は、白神山地周辺地域に生息する野生ニホンザル群と地域社会との間に共生関係を築き上げるための方策を探ることを目的に実施した。2002 年度に行なった共同利用研究（自由研究 12）の成果の上に進めた。調査地域は鯉ヶ沢町・赤石川流域、岩崎村・松神地区および西目屋村内の諸集落である。鯉ヶ沢地域農業改良普及センターの協力で得られた被害金額などの資料を踏まえて、住民がもつニホンザル観と猿害問題に対する自治体当局の取り組みに焦点を当てて各地で聞き取り調査をおこなった。広域調査の結果、各地域、自治体でそれぞれの取り組みはあるものの、有害鳥獣捕獲許可を得て駆除することに頼らざるを得ない全般的な傾向が明らかになった。しかし、西目屋村では 2002 年度から APP（アニマルパトロールプロジェクト：代表丸山直樹東農工大教授）による活動の一環として NAP（西目屋村アニマルパトロール）活動が開始され今後の展開が注目される。和田一雄元東農工大教授がリーダーをつとめている。これは都市ボランティアによるニホンザル追い払い事業が中心となり、西目屋村のように過疎・高齢化が進む地域における日常的な労働力を補う点に効果が期待されるのである。西目屋村・農林建設課が協力して事業を進めている。この事業は地域住民、自治体、研究者と都市ボランティアの共同によって地域の環境保全を持続させようとする試みであり、また都市と農村部の人的交流を深める可能性を認めることもできる。今後はこの種の取り組みを長期的に追跡し効果を検証することにより自然環境、野生動植物の適正な保全策を検討する必要がある。